

心の声が届く (自作)

私が以前担任した藤井君(仮名)のことについて、どうしてもみなさんに聞いてもらいことがあって、このお話を書くことにしました。私が今でも不思議に思っていることを、みなさんにもいっしょに考えてほしいのです。

私が藤井君を受け持ったのは、もう6年前になります。附属小学校に来る前の年で、6年生を教えていたときです。私は、その学校に長くいたので、彼が1年生の時から名前と顔を知っていました。でも担任したことはなかったので、受け持ってから、やっと彼のことを詳しく知ることになりました。

実は、彼は「難聴」でした。難聴と言うのを知ってますか？耳が悪いので、音がよく聞こえないことを言います。耳が聞こえなくなるのは、いろいろな理由があるのですが、彼は生まれつき耳が悪いのです。生まれたときから耳が悪かったということは、しゃべることもあまり上手ではないことを示します。人がしゃべることができるようになるのは、人の言葉を繰り返し繰り返し正確に耳から聞くことができるからです。

そこで彼は、補聴器をつけていました。補聴器というのは、音を大きくする小さな機械のことです。耳に付けています。エイミー先生もつけていらっしゃいましたね。補聴器にはマイクがついていて、それが周囲の音を拾って、耳の中にある小さな小さなスピーカーで大きな音にして耳に伝えるのです。私は、いつも授業をするときには、ワイヤレスマイクを首から提げていました。そのワイヤレスマイクが私の声を拾って、電波で彼の耳に付けてある補聴器に伝えるのです。そして、わずかですが私の声がかれに届くのです。

もちろん補聴器をつけたからといって、みなさんと同じように音がクリアーに聞こえるというわけではありません。少し大きな声になるという程度で、「ほとんど聞こえない」という状態には、あまりかわりがないそうです。

では、どうやって彼は授業を理解していたのだと思いますか？そうです。手話です。手話というのを知っていますね。私は、いつも手話通訳をしてくれる先生といっしょに授業をしていたのです。私が、今みなさんの前で授業をしていると同じ要領で授業をして、もう一人の先生が私の話をその場ですぐに、手話にして、彼に伝えてくれていたのです。彼は、私の顔を見たり、黒板の字を見たりするのと同じくらい、手話通訳の先生の手を見ながら授業を受けていた

のです。

がんばりやさんの彼は、少しのことでへこたれることはなかったのも、そのような身体状況の中でも、一生懸命勉強して、学力は十分身につけていました。黙って、黙々とノートに向かう姿は、いつも私を感動させていたものです。もちろん、学級の友だちをもです。

はじめに私が、今でも不思議に思っているというのは、そのことではありません。不思議だと言っているのは、彼と彼を取り巻く友だちの関係のことです。

彼は、耳がほとんど聞こえません。だからしゃべることも上手ではないのです。片言でしゃべってはいるけれど、何と言っているのかは、よくわかりません。

それなのに、それなのにです。彼は、友だちと何不自由なくいっしょに遊ぶことができます。友だちが、いつも手話で話しかけているわけではありません。いや、ほとんど全く友だちは手話など使って会話したり、遊んだりしません。でも、友だちの言うことを彼は理解することができるのです。

逆に、彼が友だちに話しかける時も手話などを使うことはしません。よく聞き取りない言葉でしゃべります。そばにいる私は何と言っているのかわかりません。でも友だちは、すぐに理解するのです。彼が難聴だと言うことは、それを人から言われるか、または、彼の補聴器を見るまでは、だれも気がつかないと思います。それほど自然なのです。

どうして、友だちと何不自由なくいっしょに遊ぶことができるのでしょうか？ どうして、友だちとのコミュニケーションが自然にとれるのでしょうか？

その秘密は、きっと、仲のよい彼ら彼女らを見て私の心がほかほかしてくる理由なのだと思います。